

学力を「認知における情意」で見る

センター協力研究員（草加市立松江中学校校長） 鍋木 良夫

1 魅力的な知的刺激だった

参加するたびに「学力とは何か」と考えさせられた。具体的には「授業で培う学力の中身は何か」「理科で培われる学力は汎用か」「入試で測定している学力の中身は何か」などであり、改めて魅力的な知的刺激であったと感じている。

また、個々の子どもの学習状況に応じて教師がどう対応するのかということについて、認知心理学的に分析しようとする学習支援の実践的試みは、現場にいる者にとって、大いに参考になった。

2 私も学力を定義してみた

これまでに得た知見が刺激となり、私に関心を寄せている「認知と情意に関する研究」も視野に入れて“学力”を定義してみた。以下、簡潔に記してみたい。

【学力】 記憶による学習、習熟による学習、理解による学習、洞察による学習、推論・問題解決による学習など、人間の学習は多様である。この多様さと同様に学力の要因も多様なるがゆえに学力は、未だにあいまいである。

例えば、「知識と知識を結びつけ再構成していく能力」「言葉を選んで対象を特定しようとするときの先行知識から適切だと思える言葉を選択する能力」なども学力と言えるし、授業中の、実験準備の時の素早い行動や実験データの解釈などもペーパーテストに馴染まないが、学力を構成する一部と考える。

(1) 定義

学習を「ある目的に向けての積極的活動」と捉えて学力を以下のように定義する。

学力とは「深く理解したいという意欲に支えられた知的好奇心を満足させるための能力で、対象に価値を感じ目的達成のための行為としての同化・調節・説明する能力」である。

(2) 内容

基底となる知識がなければ思考力は働かず、意欲も

出ない。したがって知識・思考力・技能・関心態度の4観点は横一線に並ぶものではなく、階層性がある。

① 知識

学習によって獲得される知識を指す。これは記憶や習熟等によって習得される知識を基底とし、道具や経験を通して獲得する知識がその中核を成す。

② 思考力・技能・関心意欲

- ・問題を発見する力
- ・解決の手順が分かる力
- ・観点変更の力
- ・知識と知識を関係付ける力
- ・必要に応じて精密に見ていく力
- ・表現する力（双方向のコミュニケーション能力・わかりやすく説明する力）
- ・集中を持続する力
- ・自分の進歩がわかる力（メタ認知能力）

このような能力が学力の重要な側面を形成する。

3 認知における情意研究をさらに深めたいと思った

情意測定の方法の一つにSD法がある。私は、SD法により自然認識の深まりにおける情意の導出を試み、一応の成果を得ている。その成果をもとにして、授業の終末にSD法で情意を測定し、次の授業の展開に生かすことを提唱しているが、この方法は、理解が深まった時あるいは分かった時、つまり学力獲得時における情意を評価することで、結果的には見えない学力をも含んで測定するものである。

客観的に見て学力の見ることのできる部分に焦点を当てざるを得ない学力評価の現実をよく分かるが、そこを抜け出さないと、子どものための授業は成立しない。

私にとっては、これまで以上に認知における情意の研究を深めていこうと期した1年間であった。